

相原廃寺

昭和63年度中津地区遺跡群発掘調査概報(I)

中津市文化財調査報告第7集

1989

中津市教育委員会

序 文

昭和63年に開通した国道10号線中津バイパスは、県北地域の経済発展のパイプ役として将来に大きな期待をもたれております。

しかし、経済活動の活性化に伴う地域の開発促進は、反面、文化財保護行政にとって危機的な状況をもたらす結果にもなりかねません。

中津市教育委員会ではこうした状況に対応するため、関係機関と慎重な協議を重ねながら日々文化財保護行政に取り組んでおりますが、本年度からはより体制の強化を図るため国庫および県費の補助を得て、市内に所在します重要遺跡の確認調査を向う5ヶ年の継続事業として実施することといたしました。

そこで、本年度は以前より調査の要望がありました相原廃寺について調査を行うこととし、一応の成果を上げることができました。相原廃寺は来年度以降も調査を継続し、その実態の把握に努めたいと考えております。

文化財は私達の祖先が我々に残した貴重な国民の共有財産であります。今後ともこうした認識に立ち、より一層の努力を行い、現代に生きる者の責任として、貴重な文化財を未来に伝えたいと考えております。

おわりに、調査にあたり御協力いただいた地元相原地区の方々、および御指導をいただいた調査指導委員の諸先生方、並びに県文化課をはじめ関係各位に対し、衷心より感謝の意を表する次第です。

平成元年 3月31日

中津市教育委員会

教育長 武信元

例　　言

1. 本書は、中津市教育委員会が昭和63年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。
1. 調査は、昭和63年度国宝重要文化財等保存整備事業費、及び昭和63年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。
1. 調査に当っては相原地区区長、前川十四一氏他地元住民の方々、および地権者である宮垣廣幸氏、田原亨氏、故・恒久裕氏、また鶴居公民館長 松山均氏等、多くの方々の御協力をいたいた。記して謝意を表したい。
1. 調査期間中、調査指導委員の諸先生方、及び大分県教育庁管理部文化課の諸氏には有益な御助言および御指導をいたいた。また、中津市文化財調査委員吉田良介氏は終日現場を訪れ、折にふれ御助言をいたいた。さらに、下記の方々の來訪があり有益な御指導をいたいた。

服部英雄（文化庁）、上原真人（奈良国立文化財研究所）、佐藤興治（大文市歴史資料館々長）
玉永光洋（同学芸調査係々長）、小池史哲（福岡県教育庁文化課）、朝田 泰、中野政喜（中津市文化財調査委員）

1. 調査団の構成は下記の通りである。

調査主体	中津市教育委員会		
調査責任者	教育長 古野代代（昭和63年4月1日～12月23日） 教育長職務代理者 黒川英敏（昭和63年12月24日～平成元年2月10日） 教育長 武信 元（平成元年2月11日～		
調査指導委員	賀川光夫（別府大学学長） 澤村 仁（九州芸術工科大学教授） 小田富士雄（福岡大学教授） 後藤宗俊（大分県教育庁管理部文化課々長補佐） 甲斐忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長） 真野和夫（ 調査課長）		
調査員	清水宗昭（大分県教育庁管理部文化課埋蔵文化財第一係々長） 栗焼憲児（中津市教育委員会市民文化センター主事）		
事務局	下原恒利（ 館長） 山本民子（ 文化・会館係々長） 八木山治（ 嘱託） 田中布由彦（ 主事） 宮恒和恵（ 臨時職員）12月24日まで 渡辺明美（ “ ）1月6日より		

1. 本書の執筆、編集は栗焼が行った。また遺物整理については中野温子、岩崎弘子（中津市文化財資料室）の協力を受け、現場作業は地元相原地区の井上己徳、中居角郎、林静江、矢野美智子、高橋鈴子、日野ツルエ、田原文子、猪迫悦子の方々の協力による。

目 次

第 1 章	地理と歴史的環境	1
第 2 章	調査に至る経過	4
第 3 章	調査の概要	6
第 4 章	遺物	13
第 5 章	結語	18

挿図目次

図 1	中津市内遺跡分布図	2
図 2	相原廃寺周辺地形図	5
図 3	A地区地形図	6
図 4	第1トレンチ・第2トレンチ土層図	7
図 5	A地区転用礎石及び瑞福寺移転塔心礎実測図	7
図 6	B地区地形図	9
図 7	第1トレンチ南拡張区実測図	10
図 8	第2トレンチ実測図	11
図 9	第3トレンチ実測図	11
図 10	B地区出土古瓦実測図(1)	14
図 11	B地区出土古瓦実測図(2)	15
図 12	B地区出土古瓦実測図(3)	16
図 13	B地区出土古瓦実測図(4)	17

図 版 目 次

図版 1	A 地区の調査(1)	19
図版 2	A 地区の調査(2)	20
図版 3	瑞福寺移転塔心礎・B 地区の調査(1)	21
図版 4	B 地区の調査(2)	22
図版 5	B 地区の調査(3)	23
図版 6	B 地区の調査(4)	34
図版 7	B 地区の調査(5)	25
図版 8	相原廃寺出土軒丸瓦・軒平瓦	26
図版 9	相原廃寺出土軒平瓦(1)	27
図版 10	相原廃寺出土軒平瓦(2)	28

表 目 次

表 1	中津市内遺跡地名表	3
表 2	相原廃寺出土軒丸瓦計測表	17

第1章 地理と歴史的環境

大分県の北端に位置する中津市は、奥平10万石の城下町として発展し、現在、県北の中核都市として政治、経済、文化の中心となっている。

中津市の地理は広大な沖代平野と、八面山（標高 659m）から延びる舌状台地を中心とした下毛原台地により代表される。市の東部は山国川を境に福岡県と接し、北部に周防灘、西は宇佐市、南に下毛郡三光村と接する。現在の市域は 55.617km²、人口 66,226 人である。

市内に存在する遺跡のうち、旧石器時代に属するものについては多くを語る資料はない。

縄文時代には棒垣遺跡、植野貝塚、高畠遺跡などがあり、いずれも後期に属する。

弥生時代の遺跡は下毛原台地及び、山国川右岸の自然堤防上に多く存在するが、近年の調査によれば、標高80m前後の高地（平野部との比高差60m以上）にも集落の存在が確認され、新たな展開をみせつつある。

古墳時代に入ると、遺跡の数は増加傾向をみせ、そのうち集落関係としては大坪遺跡、草場遺跡、十前垣遺跡、前田遺跡第2地点、稗多田遺跡、上万田遺跡などがある。特に、近年の調査例をみると、平野部での発見例が目立っている。時期的には4世紀代を中心とした一群と6世紀代の一群に大別され、後者は伊藤田窯跡群を背景とした展開をみせている。墓制にかかるものとしては上の原横穴、岩井崎横穴、城山古墳群、城山横穴、幣旗邸古墳などがある。このうち、上の原横穴については、保存状態が良好な事と相俟って、葬送儀礼、家長制など当時の社会状況の復元が積極的に論じられている。尚、市内に存在した唯一の前方後円墳であった亀山古墳は昭和30年頃、国道10号線建設に伴い未調査のまま破壊されている。次に、生産に関するものとして伊藤田窯跡群がある。現在までに都合10基程が調査されており、6世紀後半から8世紀代に至る須恵器、瓦などの生産が認められている。特に踊ヶ迫窯での所謂須恵質瓦の生産や、相原廃寺への供給関係が確認されたホヤ池窯の調査結果は注目される。

白鳳期から奈良時代にかけて注目されるのは相原廃寺と、沖代条里遺構である。相原廃寺については後述するが、沖代条里については少なくとも8世紀前半には成立したと考えられている。その遺存状況は良好とされるが、近年急速に宅地化が進行しつつあり、これに対応して確認調査等を行っているが十分な成果は上がっていない。また、相原廃寺との関連も考えねばならず、今後の調査に期待したい。

この他、近年の調査では平安時代から室町時代にかけての例が増加しつつある。前田遺跡、前田遺跡第2地点、安平遺跡、安平北遺跡、鍋島遺跡C地点などで、瓦器、輸入陶磁器などをはじめ、木製品などの良好な資料が得られている。

周 防 滩

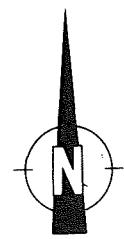


図 1 中津市内遺跡分布図

No.	遺跡名	種別	所在地	No.	遺跡名	種別	所在地
1	鍋島古墳	古墳	今津	40	下池永遺跡	散布地	池永
2	鍋島遺跡	散布地	"	41	全徳遺跡	散布地	合馬
3	若篠古墳	古墳	今津	42	相原廃寺	寺院	相原
4	植野貝塚	貝塚	植野	43	三口遺跡	包含地	上ノ原
5	植野伽藍遺跡	散布地	"	44	上万田遺跡	包含地	万田
6	植野古城遺跡	散布地	"	45	高瀬遺跡	包含地	高瀬
7	野依古墳	古墳	野依	46	高畠遺跡	包含地	"
8	松尾遺跡	散布地	"	47	豊田小学校遺跡	包含地	豊田町
9	是則塚	古墳	"	48	亀山古墳(消滅)	古墳	合馬
10	黒川古墳	古墳	伊藤田	49	沖代条里遺構	条里	沖代町
11	大池窯跡	窯跡	野依	50	野依条里遺構	条里	野依
12	瓦ヶ迫窯跡	窯跡	"	51	大悟法条里遺構	条里	大悟法
13	野依迫ノ谷遺跡	散布地	"	52	大池窯跡	窯跡	野依
14	踊ヶ迫窯跡群	窯跡		53	草場遺跡	散布地	伊藤田
15	穂谷窯跡群	窯跡	"	54	草場窯跡	窯跡	伊藤田
16	野依烽火台	烽火台	"	55	城山窯跡群	窯跡	伊藤田
17	ゴンゲ遺跡	散布地	"	56	大谷窯跡群	窯跡	伊藤田
18	大谷窯跡群	窯跡	"	57	才木遺跡	散布地	"
19	城山横穴群	横穴	伊藤田	58	洞ノ上窯跡	窯跡	"
20	城山古墳群	古墳	"	59	入垣貝塚	貝塚	福島
21	洞ノ上横穴群	横穴	伊藤田	60	棒垣遺跡	包含地	"
22	城土遺跡	散布地	伊藤田	61	福島地下式横穴	横穴	"
23	福島遺跡	包含地	福島	62	北原第3遺跡	散布地	北原
24	三保遺跡	包含地	"	63	大悟法遺跡	散布地	大悟法
25	田丸遺跡	城跡	"	64	中原遺跡	散布地	中原
26	長久寺貝塚	貝塚	"	65	上池永遺跡	散布地	池永
27	北原遺跡	散布地	北原	66	西永添遺跡	散布地	永添
28	北原第2遺跡	散布地	"	67	勘助野地遺跡	墳墓	上ノ原
29	土木貝塚	貝塚	"	68	上ノ原横穴群	横穴	"
30	定留貝塚	貝塚	定留	69	沖代小学校遺跡	水田跡?	沖代町
31	黒水遺跡	散布地	加来	70	合馬遺跡	散布地	合馬
32	上ノ原遺跡	包含地	上ノ原	71	ガラヌノ遺跡	古墳・墓跡	合馬
33	幣旗邸古墳	古墳	"	72	舞手橋東段上遺跡	住居趾?	田尻
34	相原古墳1、2号	古墳	"	73	是能遺跡	散布地	定留
35	坂手隈横穴群	横穴	"	74	和間貝塚	貝塚	定留
36	坂手前横穴	横穴	"	75	諸田遺跡	散布地	今津
37	台遺跡	散布地	"	76	中津城	城跡	二ノ丁
38	永添中園遺跡	包含地	永添	77	停車場遺跡	散布地	今津
39	梶屋遺跡	散布地	"	78	植野遺跡	散布地	植野

表1 中津市内遺跡地名表

第2章 調査に至る経過

大分県と福岡県の県境を流れる山国川は、県北有数の沖代平野を形成し周防灘へ至る。この沖代平野の南隅、山国川の東岸に位置する相原廃寺は、対岸に位置する垂水廃寺とともに本地域を代表する仏教遺跡として著名である。

相原廃寺が初めて学会に知られたのは1945年頃で、古瓦等が散布することなどから辻善之助、石田茂作博士等により注目された。しかし、文献資料などに乏しく、豊前国分尼寺に推定されるなど極めて曖昧な取り扱いをなされていた。

こうした状況の中、地元郷土史家である吉田良介氏（現中津市文化財調査委員）は精力的に現地踏査を行い、1951年頃には原位置を保つと思われる礎石2個と、版築による基壇の一部を確認した。これは初めて相原廃寺の存在を実態として把握したという点において、現在もなお高い評価を受けている。

1954年、中津市教育委員会の要請を受けた賀川光夫氏は、相原廃寺周辺の地形測量及び聞き取り調査等を行った。その結果、伽藍配置については原位置を保つ2個の礎石及び塔心礎が発見されたと言われる位置を考慮して「法隆寺式」を推定された。また、古瓦については百濟系の単弁八弁軒丸瓦と、重孤文軒平瓦がこれに伴う点を指摘している。そして、これらを総合して、相原廃寺の成立を7世紀後半とした。

その後も賀川氏は、伊藤田躊ヶ迫窯跡出土の所謂「須恵質瓦」との関連などを中心に相原廃寺の創建について言及し、特に版築基壇の土中よりこの種の瓦が出土した点に注目し、6世紀後半に創建された後、7世紀後半に再建された可能性を示唆している。

また、九州における古代寺院の研究を精力的に進められている小田富士雄氏も、相原廃寺、特に出土瓦について度々言及されている。氏は、九州地方、中でも北部九州を中心に出土する百濟系古瓦に対する論考の中で、相原廃寺出土の瓦について、セット関係及び瓦当文様の特徴などから7世紀末頃の年代を与えていた。

この様に、相原廃寺はこれまで様々な形で学界に紹介されてきたが、遺跡の保存については1974年に保護柵が設けられ、1981年には中津市指定文化財に指定された以外、調査等の具体的な方策がとられないままに半ば放置された状況となっていた。

こうした状況に対し、1986年「中津地方の重要文化財保存促進協議会」（会長 横松宗）より、中津市議会に対し、相原廃寺の保存、活用を目的とした発掘調査実施に対する陳情書が提出され、また地元住民からも同様の要望が多く寄せられた。

これをうけて、中津市教育委員会では大分県教育委員会と協議を重ねた結果、1988年度より5ヶ年計画で周辺地域を含めた確認調査を、国庫及び県費の補助を受けて実施することとした。ここにようやく発見以来40年余りを経て、相原廃寺に対して本格的な調査のメスが入れれることとなつたのである。

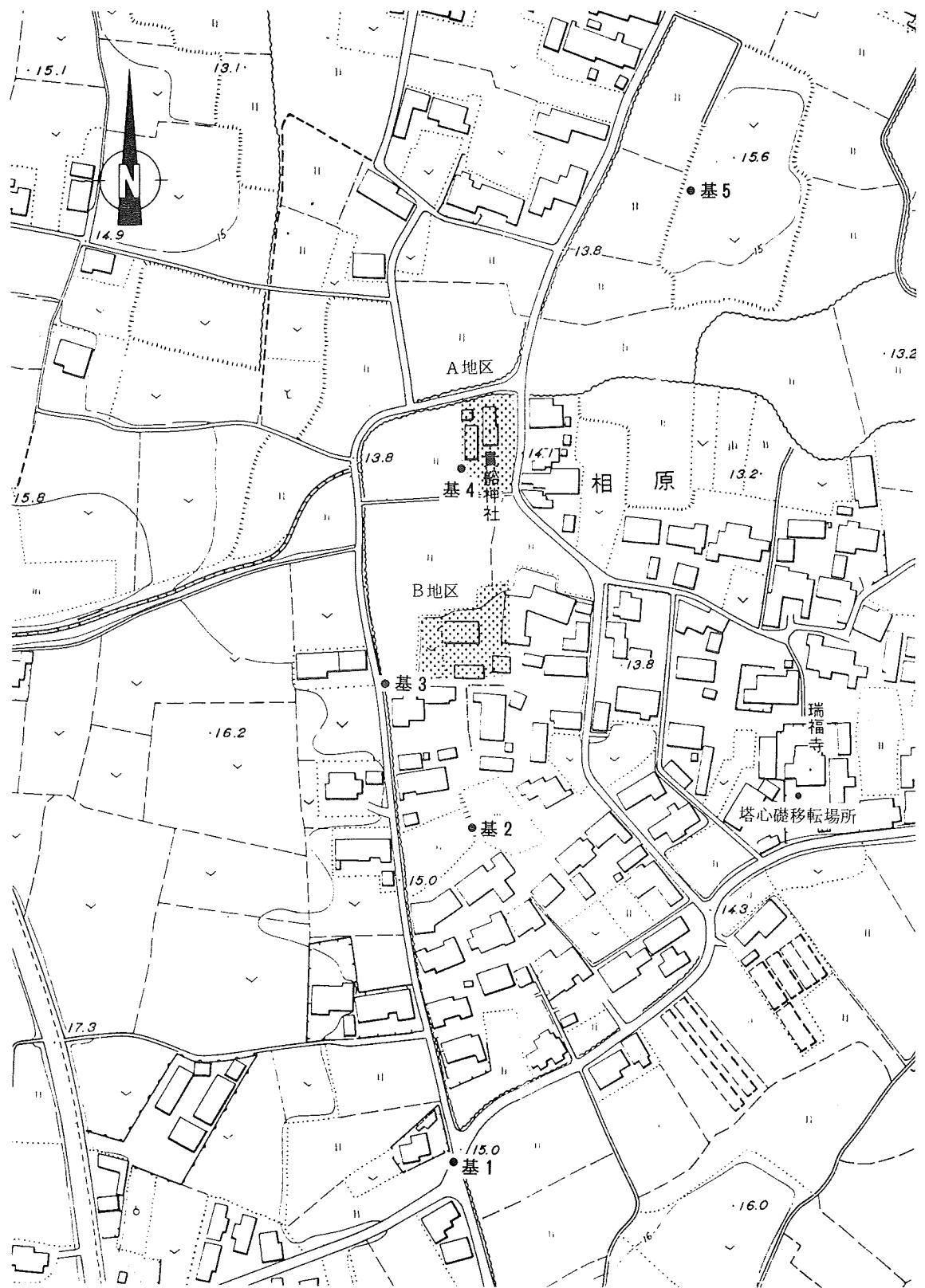


図2 相原廃寺周辺地形図 ($S = \frac{1}{2500}$)

第3章 調査の概要

調査に先立ち、調査委員会で確認された事項は次の通りである。まず今年度については現在遺構の残されている地点（相原3657-1、3657-2、3658、3662番地。以下B地区とする）と、礎石が

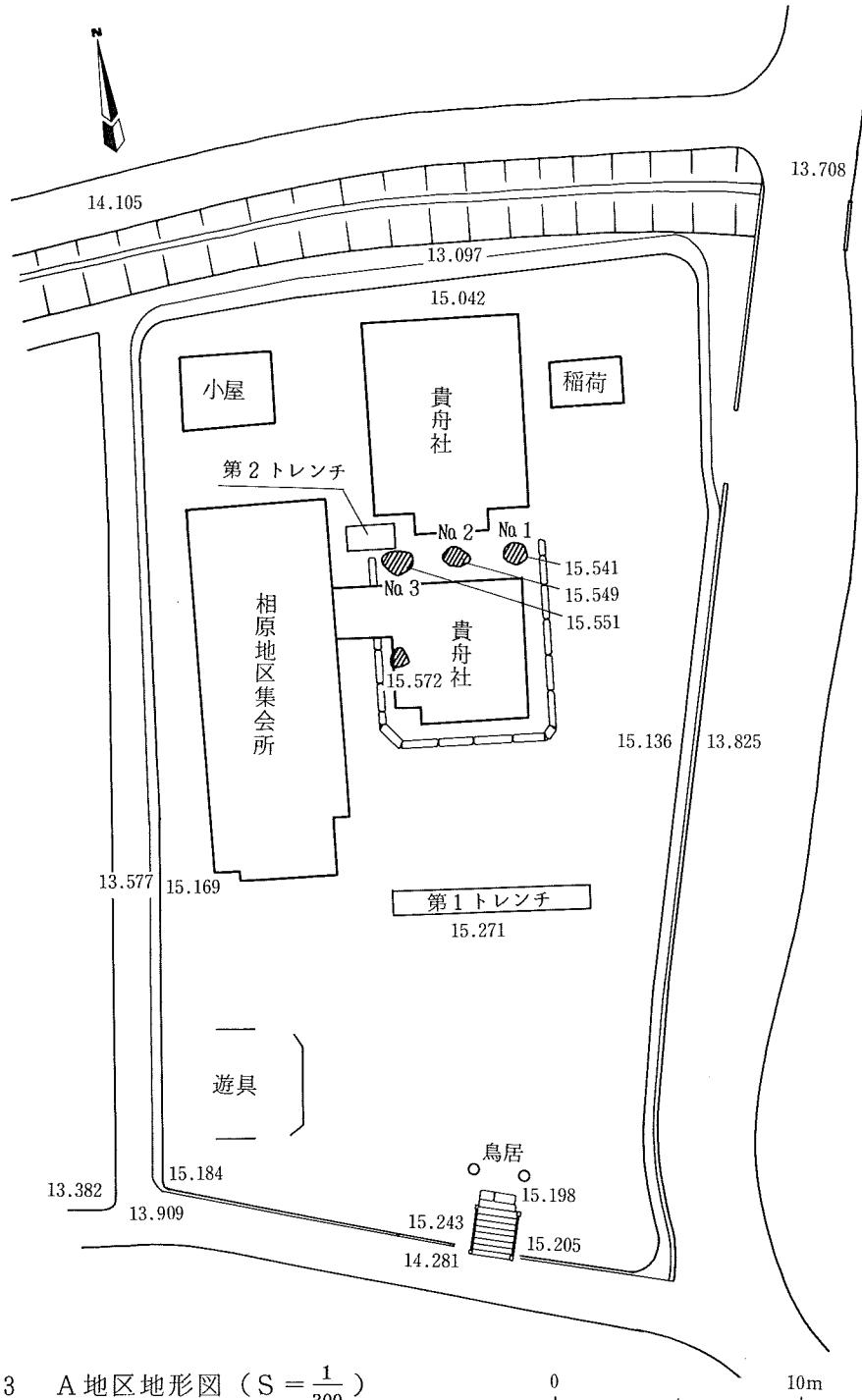
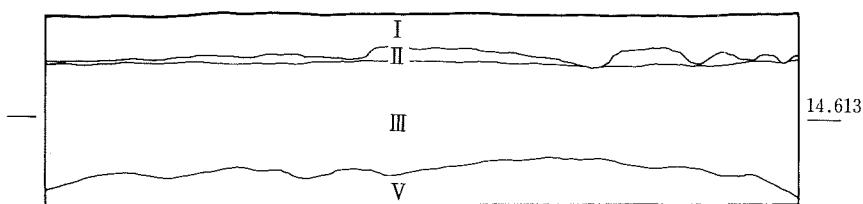
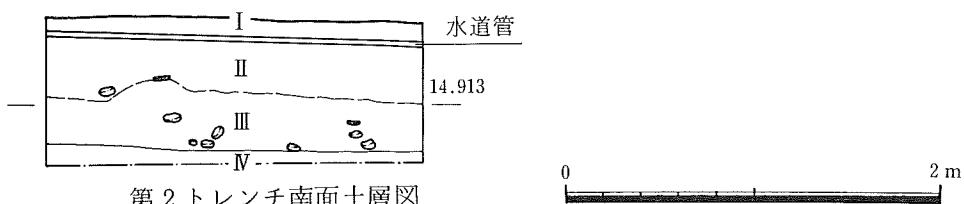


図3 A地区地形図 ($S = \frac{1}{300}$)

0 10m



第1トレンチ南面土層図



第2トレンチ南面土層図

図4 A地区第1トレンチ、第2トレンチ土層図 ($S = \frac{1}{40}$)

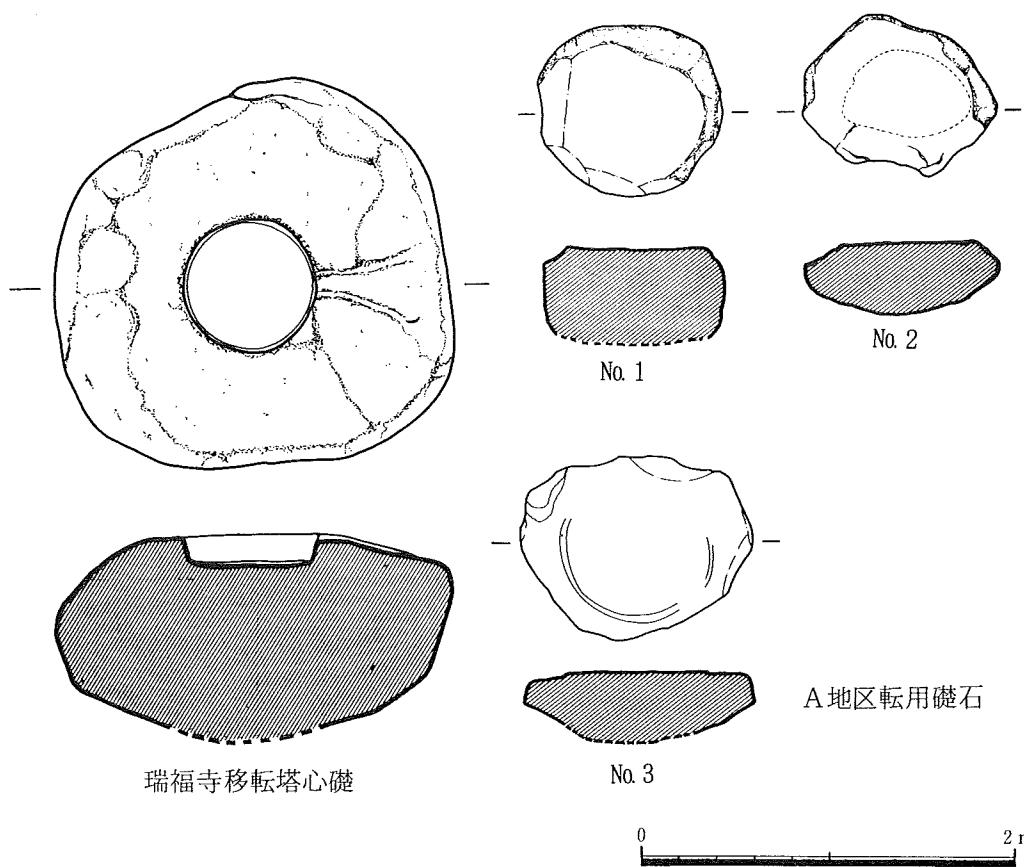


図5 A地区転用礎石及び瑞福寺移転塔心礎実測図 ($S = \frac{1}{40}$)

多く残されている貴舟神社境内（以下A地区とする）についてトレンチ方式による確認調査を行うこと。調査予定地域について基準点測量を実施すること。来年度以降については今年度の成果をふまえた上で、調査地点の選定を行うの3点であった。

相原廃寺についてはA地区に残されている10個の礎石（うち6個は貴舟神社石垣に使用）と、B地区に残存する版築基壇の一部と2個の礎石、および付近の瑞福寺に移転されている塔心礎以外にその実態を知る手掛はない。特にB地区の残存基壇と、宅地との比高差が約2m程度、さらに宅地と水田についても1m程の差があり、これが遺跡の完全な削平を意味するものか、もともとこうした地形であったのかが一番の問題であった。

また、B地区の北約40mに位置する貴舟神社（A地区）については、水田より一段高い部分にあたり、一定の規則をもって配置される礎石4個が残存している。この礎石については従来より原位置を動いた後の転用との見方が強かったが、一応の確認調査が必要との判断で調査を行った。

この他、併せて瑞福寺に移転されている塔心礎の実測を行った。

1. A地区の調査

調査はまず、地区内の土層の堆積状況の確認から行った。調査区は、A地区中央部に巾1m×長8mの第1トレンチを東西方向に設定した。その結果、現表上より約20cmの厚さで貴舟神社境内の整地層（I層）が存在し、その下部に旧耕作土と考えられる淡茶色層（II層）が薄く（2～10cm）認められた。さらに50～70cmに及ぶクロボク層（III層）が厚く堆積した後、漸移的に茶褐色土（IV層）へと移行する。つまり、III、IV層については全くの自然堆積の様子を示しており、この時点でA地区内に相原廃寺の関連遺構が存在する可能性は低くなったと考えられた。

さらに念のため、4個の礎石が整然と残されているA地区北側に第1トレンチと併行して第2トレンチ（巾1m×長2m）を設け、さらに土層の確認をった。その結果、第2トレンチでは表土より約10cmの厚さの整地層（I層）、さらに約30cmの淡茶色層（II層）、約20cmの茶色層（III層）が認められた。II、III層については古瓦片や礫を含むことや、粘質土のブロックが認められるなど攪乱されている可能性が強い、また、この下層に第1トレンチで認められたクロボク層（IV層）が存在することから、II、III層については神社境内造成時の一括埋土と考えられた。つまり、自然地形である島状の微高地を利用して神社境内の造成が行われたと推定された。

また、整然と配置された礎石4個のうち、調査可能な3個についてその据え付け状況を確認するためにサブトレンチを設定した。その結果、根固めの石を確認したが、この間に古瓦が普遍的に含まれることはどから、原位置を保つものではないと判断した。こうした在り方は、B地区基壇残存部に残された2個の礎石が根固めの石を用いない点と大きく相違するものである。尚、その後の地元古老の話により、この礎石が戦後まで貴舟神社旧社殿の礎石として用いられていたことが明らかとなった。

以上の結果、A地区については相原廃寺もしくは関連の遺構が存在する可能性は極めて低くなつたと言える。さらに、昭和29年に賀川氏の行った調査の際、A地区周辺で合計21個の転用された礎石が確認されていたが、その後の神社石垣の改修等により今回確認されたのは境内に4個、石垣部

分に6個の計10個であった。

2. 瑞福寺移転塔心礎

今回、発掘調査と併せて付近の瑞福寺に移転、保存されている塔心礎の実測調査を行った。塔心礎が瑞福寺に移転された経過については明確な記録は残っていないが、地元古老人の話によれば、明

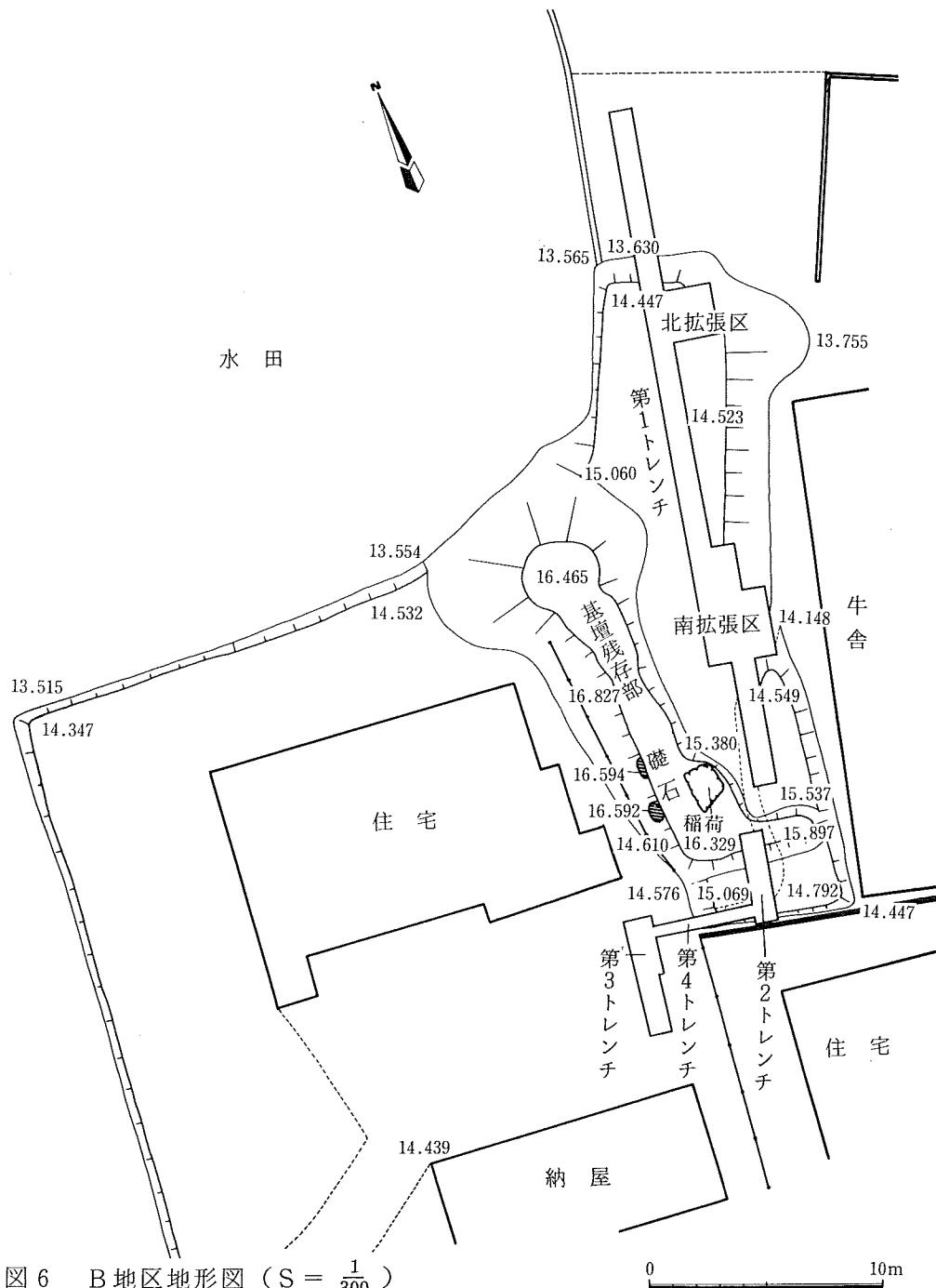


図6 B地区地形図 ($S = \frac{1}{300}$)

治10年頃に行われたと言われる。瑞福寺にもそうした内容の記録が残されているが明確ではない。また、塔心礎が移転前にあったとされるB地区の基壇残存部分の西約40mの地点では、現在一部地下げが行われ、水田となっている。しかし、宅地部分には古瓦の散布がみられ、昨年、一部市道の拡張が行われた際にも古瓦が出土している。こうしたことから、この位置が塔址として推定されているが、現状のレベルが基壇残存部より約2m近く低いことや、昨年一部市道の拡張に伴い西側の

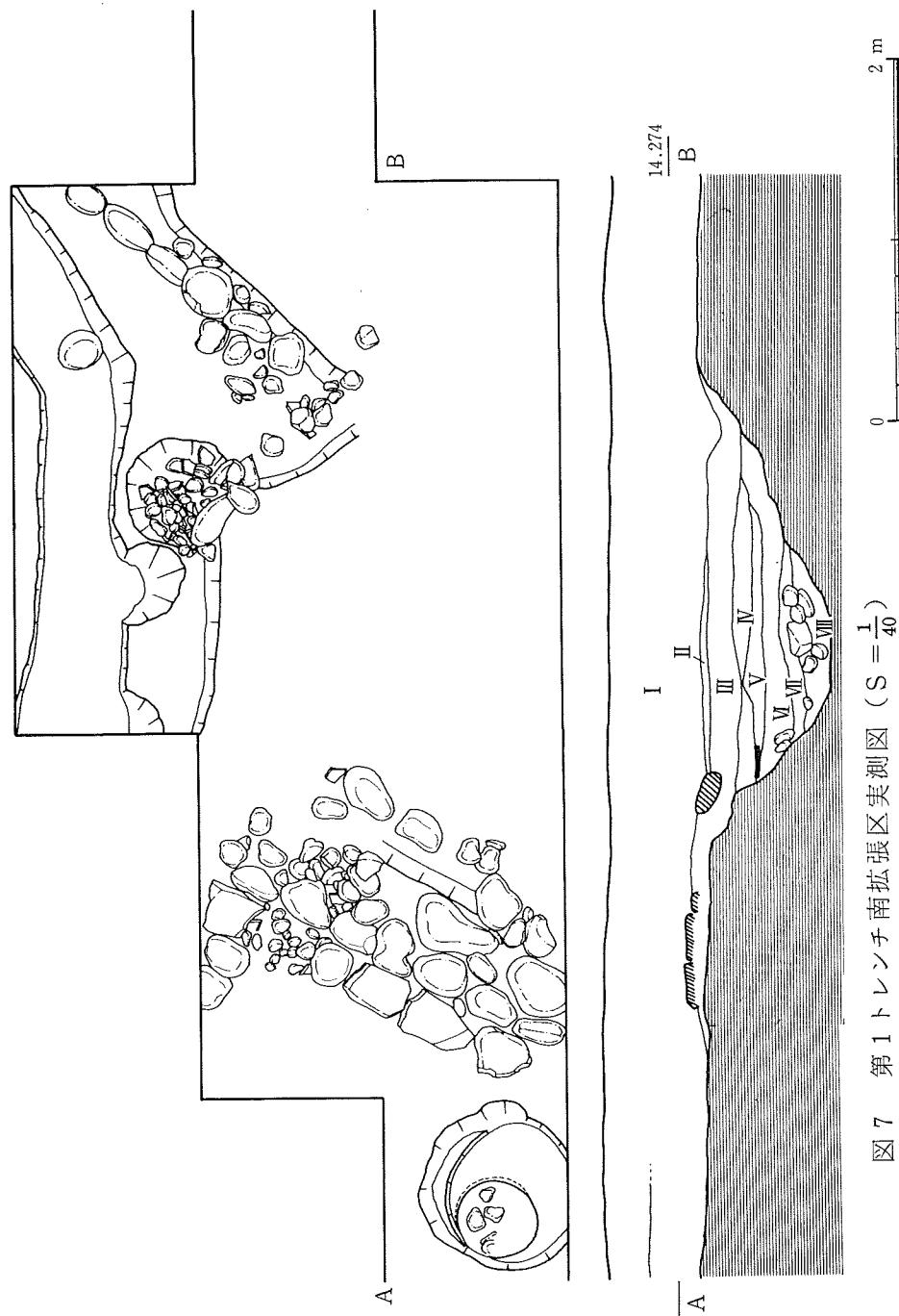
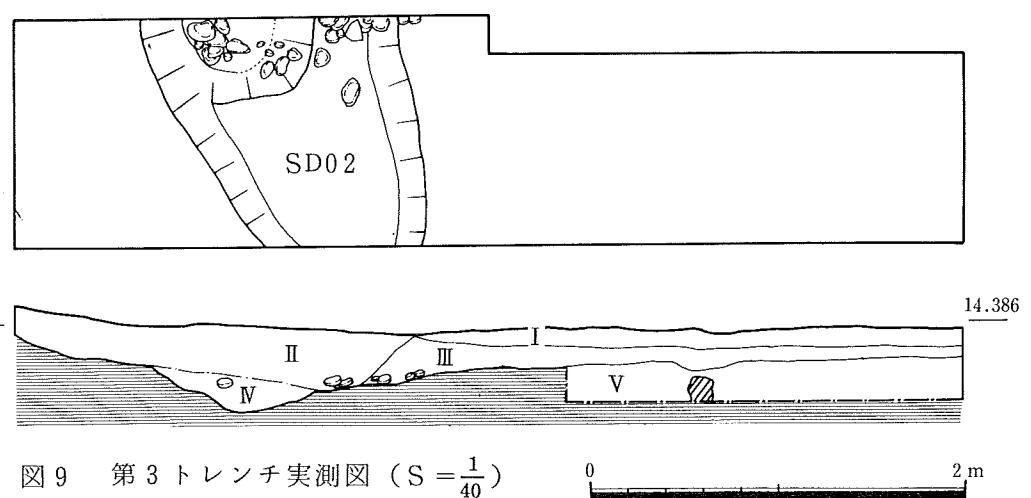
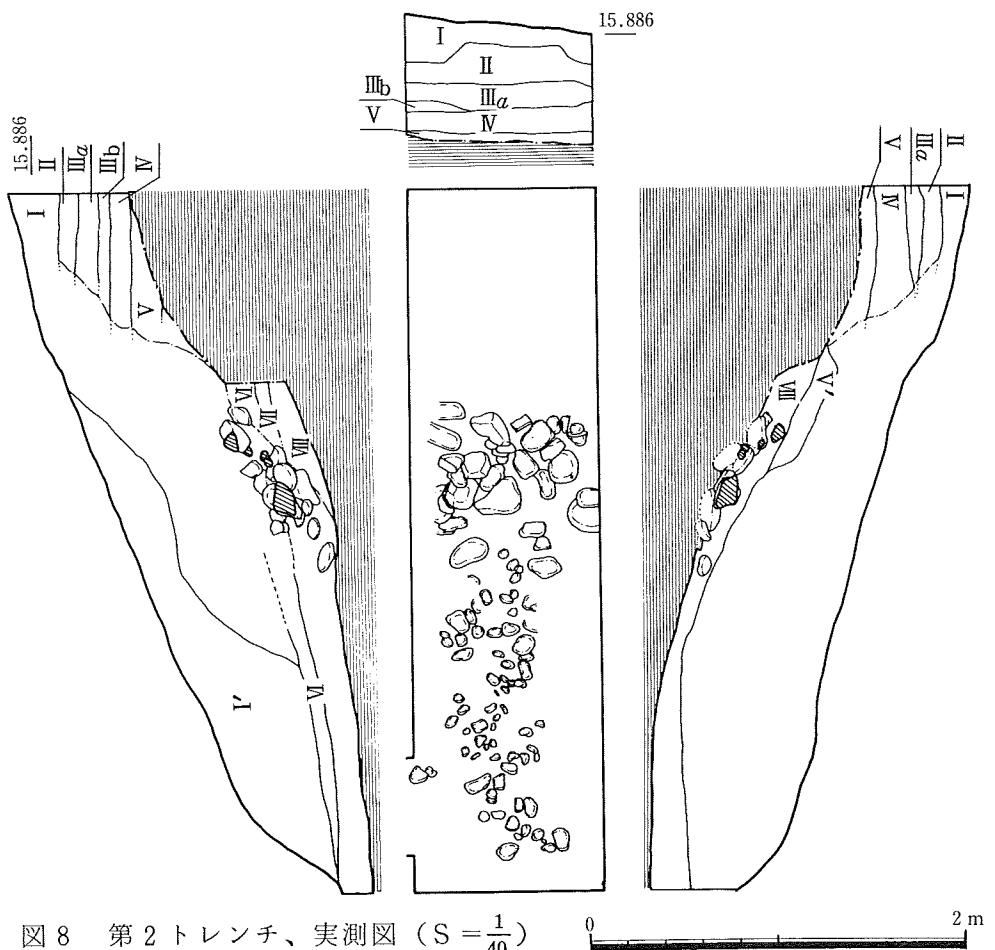


図7 第1トレンチ南拡張区実測図 ($S = \frac{1}{40}$)



微高地が若干削られた時に行った立ち合い調査の結果、慎重に対応する必要性が生じている。つまり、西側微高地はB地区基壇残存部に近いレベルを有しているにもかかわらず、表土下約1mにわたりクロボク層の堆積がみられ、A地区で認められたような自然堆積を示している。したがって、この西側微高地上に塔址が存在する可能性は少なく、また、この微高地に接して塔基壇が存在していたとも考えにくい状況と言える。

いずれにせよ、遺構の位置関係については今後の調査結果を待って、慎重に論じられるべきであろう。

尚、塔心礎は実測調査の結果、最大径2.1m、最大厚1.1m、柄穴径0.7m、深さ0.15mを有し、花崗岩を素材としている。賀川氏は昭和29年に行った調査の際、この塔心礎の規模と類似する寺代古院の例との比較から、高さ24m程度を有する塔を推定されている。

現在塔心礎は、「いぼ石」として瑞福寺内に安置され、民間信仰の対象となっている。

3. B地区の調査

B地区は相原廃寺の存在を示す唯一の遺構が存在する地区である。現在、遺構は最大巾10m程、最大長20m程の島状に残された基壇遺構と、この上面に原位置を保つと思われる礎石2個が存在するにすぎない。周囲は戦後の宅地造成に伴い削平されており、比高差は2m近くになる。また、礎石についても半ば宙吊りの状態で、かろうじて支柱で支えている有様である。その断面をみると、版築作業の様子を見る事ができるが、豊前地方に存在する多くの古代寺院と比べ、極めて丁寧な作業が行われており印象的である。また、礎石の底面をみると、根固めの石が入れられておらず版築面の上に直接据えられている事が確認できる。

調査はこうした状況をふまえ、現在宅地として地下げされている面と基壇との関係、掘込地業の有無、宅地面より一段低い水田面との関係、基壇端の確認などを主眼に行った。

まず、B地区内中央部に全体を南北方向に分断する形で巾1mのトレンチを設定した（第1トレンチ）。基壇はB地区西側半分に片寄った状態で残されており、第1トレンチを設定した部分は一段低くなっている。したがって、このトレンチでは水田面、宅地面と基壇の関係をさぐることを意図とした。その結果、表面から0.6mほどで硬質の基盤層が存在し、ここまで一部を除き、搅乱、もしくは二次堆積によるものであった。基盤層は川砂に近い粗い粒子で構成され、極めて硬質であった。この基盤層面に掘り込む形でトレンチ北側に溝状遺構が確認され、また南側では河原石を用いた石列が確認されたため、それぞれ北拡張区、南拡張区として範囲確認に努めた。しかし、その規模、基壇部分との関連等は今回確認することができず、来年度以降に課題を残した。

次に、基盤層と基壇版築部分との関連をつかむために、第1トレンチを南へ延長した結果、竹根による搅乱等のため版築状況は明確にしえなかつたものの、少なくともこの基盤層の上に、直接版築作業が行われたことは確認出来た。

さらに、基壇端を確認するために、B地区南端の第1トレンチの延長線上に第2トレンチを設定した。第2トレンチでは表土下20cm付近から版築層が確認出来、斜下方へ傾斜している状況がみられた。また、この下方にはやや乱れているものの河原石による基壇端と思われる遺構が存在してお

り、礎石との位置関係などから、この部分が基壇の南限と推定した。尚、基壇端に連続する形で、玉砂利を敷いた雨落ちと思われる遺構も検出された。

第3トレンチは第2トレンチに併行する形で宅地面に設定した。ここでは、宅地面での遺構の遺存状態を確認することに努めた結果、表土下約10cmは宅地の整地層で、茶褐色土層をはさみ基盤層が検出された。この基盤層には基壇端に併行する状況で溝状遺構が確認されているが、その関連性については明確でない。

この第3トレンチと第2トレンチをつなぐ形で巾50cmの第4トレンチを直角方向に設定した。第3トレンチでみられた溝状遺構はやはり基壇端と併行して存在し、さらに第2、3、4トレンチをトータルで観察すると、版築作業は基盤層面から直接行われていることが一層明確となった。したがって、基壇構築において掘込地業は全く行われておらず、その原因として基盤層が極めて安定していたためとの結論を得た。

B地区各挿図の土層の観察結果は以下の通り。

○第1トレンチ（図7）

I攪乱土層 II黄褐色土層。礫まじりでパサパサしている III茶褐色土層。小石を含みややしまっている。IV黒色土層、ふかふかしており、版築層に類似 V淡茶褐色土層、褐色上ブロックを含み、礫混り VI茶褐色土層。褐色、黒色ブロックを含む。ふかふかしている。VII茶色土層しまっており、礫、古瓦を含む VIII茶色土層。VII層よりやわらかく、礫を含む。

○第2トレンチ（図8）

I攪乱土層 II茶褐色土層 版築と認めうる最上部の層。ふかふかし、不純物をあまり含まない III明褐色土層 磕を含みやや粗い土を用いる。西側土層面では若干の土色の違いから a、b層に分層した IV黒色土層 ふかふかし、部分的に茶色の小ブロックが混る V暗茶褐色土層 他の版築層に比べてしまっている。不純物はなく、きめの細かい土質 VI褐色土層 ふかふかしており、版築土の二次堆積か VII黒色土層 IV層類似の版築層 VIII暗茶褐色土層 VI層類似の版築層

○第3トレンチ（図9）

I宅地整地層 II茶褐色土層 溝状遺構含土。北側では表土層とほとんど区別がない III淡茶褐色土層 II層と大差ないが、ふかふかして褐色ブロックを含む IV茶褐色土層 II層に比べやや明るく、褐色ブロックを含む V灰色土層 一連の硬質基盤層で、粗い粒子ながら礫を含み極めて硬質である。

第4章 遺物

今回の調査で出土した遺物はほとんどが古瓦で、若干の須恵器・土師器なども出土した。しかし出土状態は悪く、A地区では全て二次堆積土中から、B地区でも表面彩集、攪乱土層中がほとんどで、原位置を保つものは極めて少ない。特にB地区の表面彩集資料は全体の半分以上を占める。遺物総数はパンケースで約60箱程度である。以下若干の分類を行った。

軒丸瓦（表2）

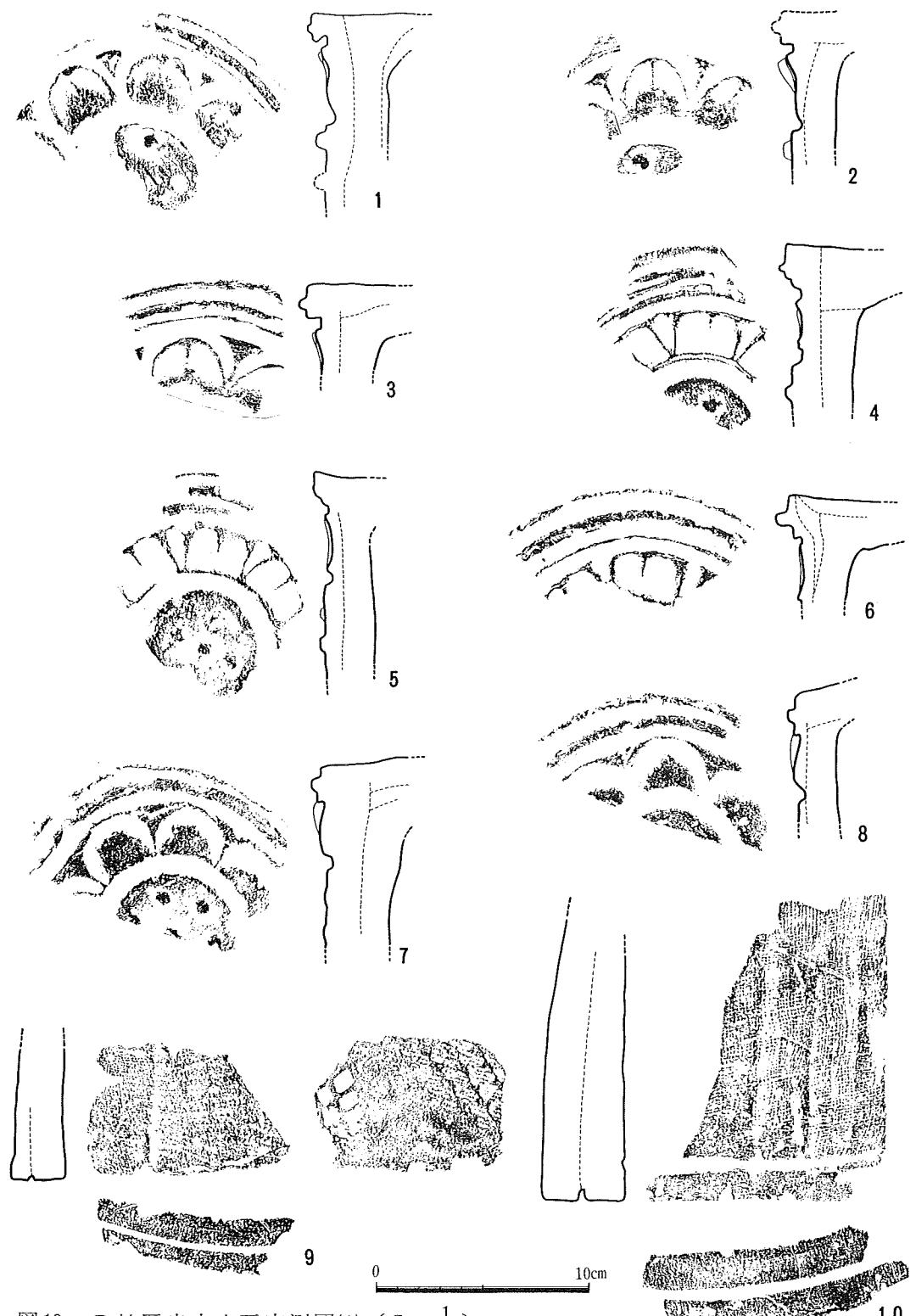


図10 B 地区出土古瓦実測図(1) ($S = \frac{1}{3}$)

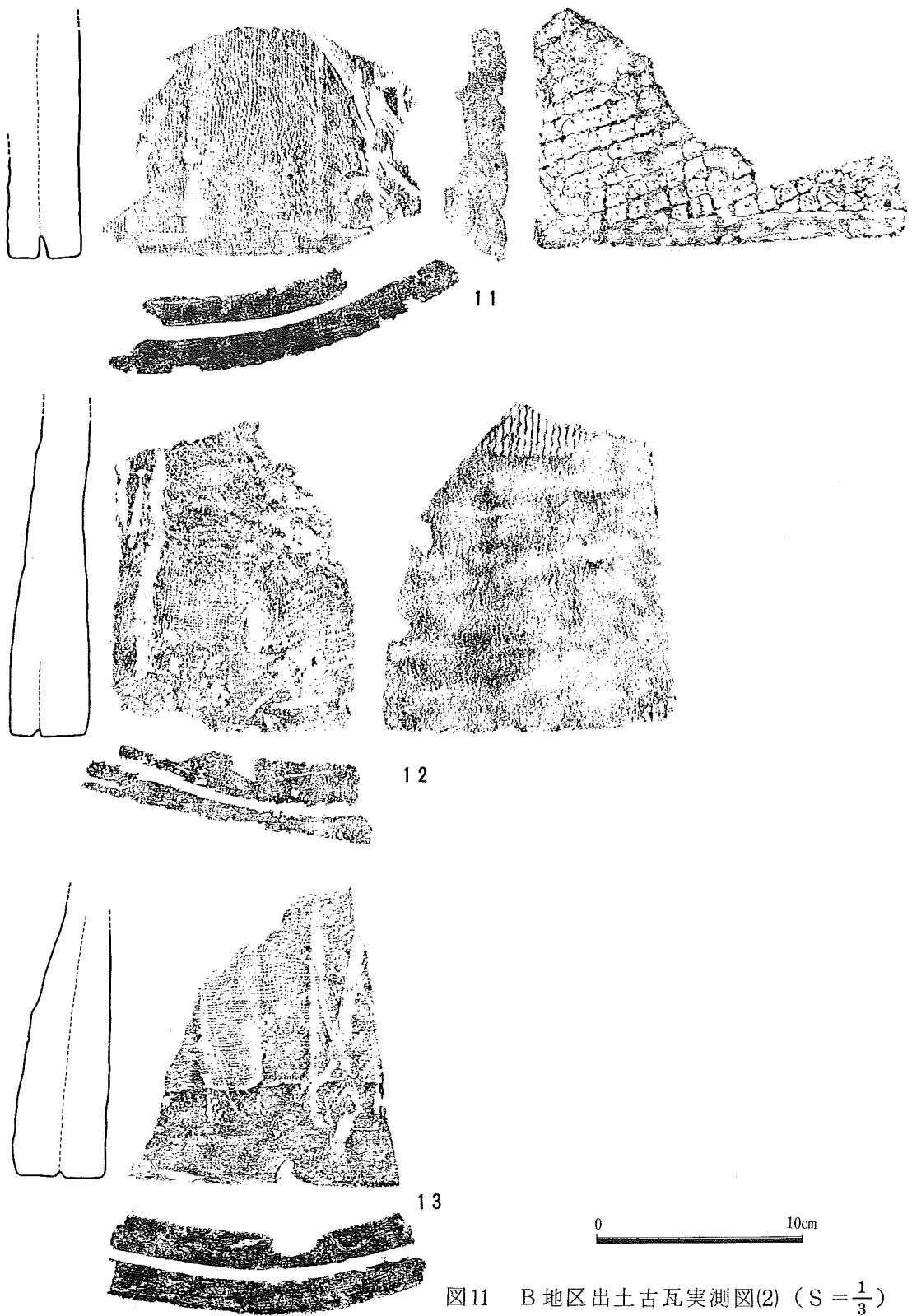


図11 B地区出土古瓦実測図(2) ($S = \frac{1}{3}$)

図12 B地区出土古瓦実測図(3) ($S = \frac{1}{4}$)



— 16 —

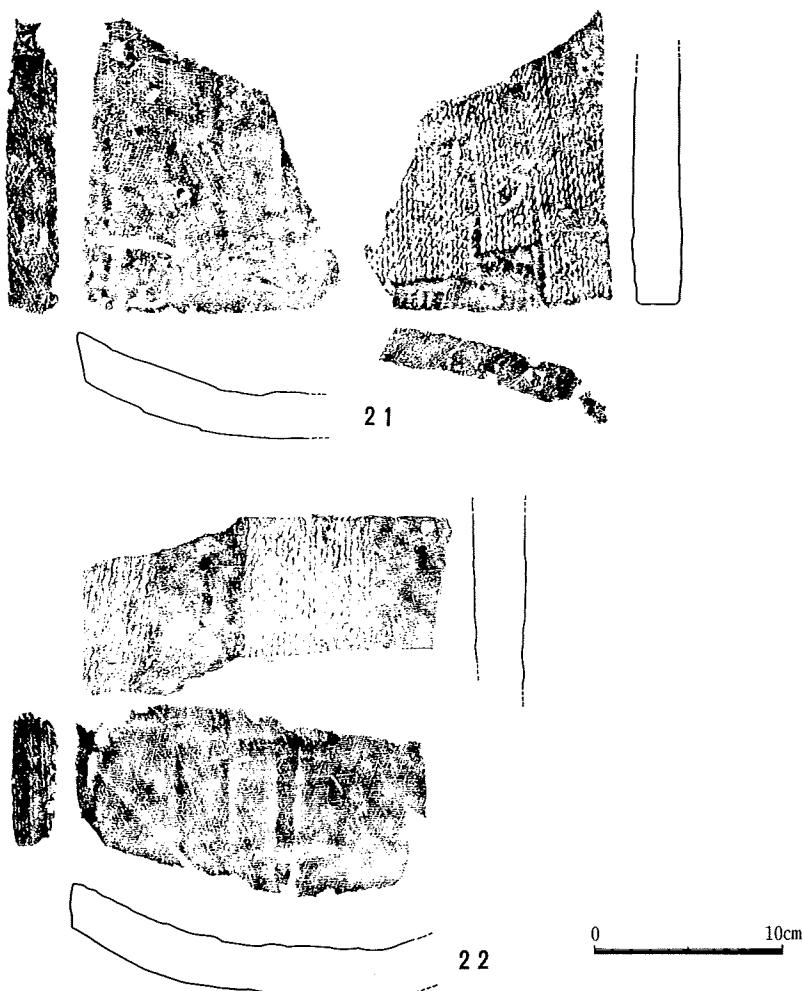


図13 B地区出土古瓦実測図(4) ($S = \frac{1}{4}$)

表2 相原廢寺出土 軒丸瓦計測表

No.	型式	直径	内 区						外 区			接合法	瓦当厚		
			中 房		蓮子数	蓮子径		弁区径	弁数	幅	高	形態			
			径	高		中央	周囲								
1	A	(156)	(56)	4	(1+6)	8	9	(128)	8	14	10	切込	B	(35)	
2	A	(160)	(48)	5	(1+6)	—	9	(124)	8	(15)	(10)	直立	A	(25)	
3	A	(164)	—	—	(1+6)	—	—	(132)	8	17	11	直立	B	—	
4	B	(154)	(50)	4	(1+6)	7	8	(116)	8	16	12	有段	A	26	
5	B	(149)	(52)	5	(1+6)	—	8	(124)	8	21	10	有段	—	(32)	
6	B	(162)	—	—	(1+6)	—	—	(122)	8	20	13	直立		—	
7	C	(150)	(56)	3	(1+6)	8	9	(118)	8	16	6	直立	B	30	
8	C	(160)	(60)	4	(1+6)	—	—	(120)	8	20	—	直立	A	—	

: 単位 mm : () は推定値

全て単弁八弁蓮華文軒丸瓦で、A～Cの3種が認められる。

- ・A類 所謂、百濟系とされるもので、小田氏の分類によればII～A類(2)、II-B類(1、3)とされるもの。(文献3参照)
- ・B類 A類より派生したと考えられ、花弁はほとんど盛り上りがなく、子葉は無い。外区は一重圏の周縁を有する。
- ・C類 同じくA類より派生したと考えられるもので、花弁は中央部が盛り上り、丸味をもつ。子葉は無く外区は一重圏の周縁を有する。

軒平瓦

全て重孤文軒平瓦で、とがった笠で一線を刻んだ単純なものである。顎部は全て貼りつけによって仕上げており、断面はなだらかなカーブをもつ。顎面はナデにより成形されるものが多いが、繩目、格子目によるものも認められる。また、9のごとく厚さなど全体に小型のものも認められ、今後注意を要する。

平 瓦

ほとんどが破片で全容を知りえないが、桶巻作りによる。凸面の叩きにより分類できる。

- ・A類 格子叩きを有するもので、その形状により4類に分けられる。
 - 1類は方形の格子叩き、2類はこれに対角線が加わり、3類は縄目状の叩きを行った後に格子叩きを行う。4類は所謂斜格子叩きである。
- ・B類 縄目叩きを行うもので、全面に行うもの(1類)と部分的なもの(2類)がある。
この他、平行刻線による叩など数種類が認められるが、今回図示しえなかった。

第5章 結 語

以上、今年度の調査についてその概要を述べた。成果としては、1) B地区基壇残存部で南側の基壇端を確認したこと、2) 宅地面においても遺構が残存する可能性を知りえたこと、3) 軒丸瓦について従来論じられていたA類主体ではなく、B、C類も同様の比率で存在することなどが上げられる。また、遺構の配置などについては従来の「法隆寺式」との考え方を再考する必要性も生じており、今後に多くの課題を残した。いずれにせよ、調査はようやく開始されたばかりであり、来年度は調査範囲を拡大し、より広範囲にわたり遺構の確認を行ないたいと考えている。

尚、今年度実施した基準点測量の成果は次の通りである。(位置については図2に示した)

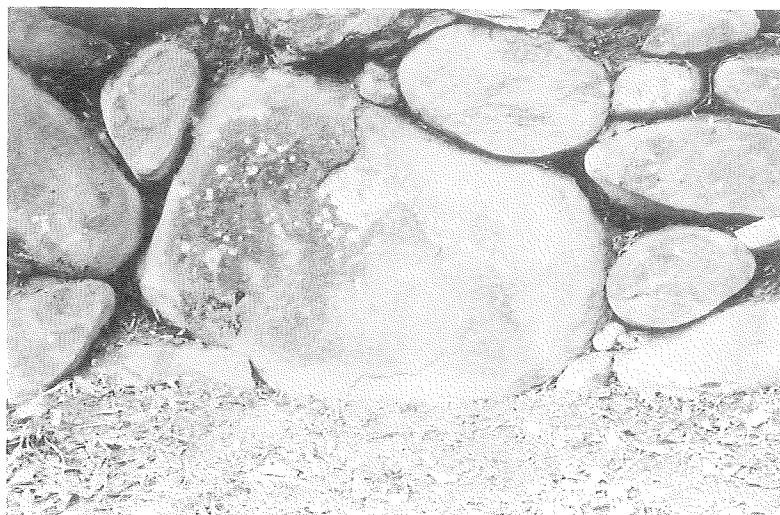
点名	X	Y	H	点名	X	Y	H
基1	+ 62760.701	+ 17848.428	15.178	基4	+ 63040.626	+ 17857.351	15.341
基2	+ 62894.526	+ 17854.616	14.380	基5	+ 63143.158	+ 17945.086	15.187
基3	+ 62959.528	+ 17821.148	14.737				

<主要参考文献>

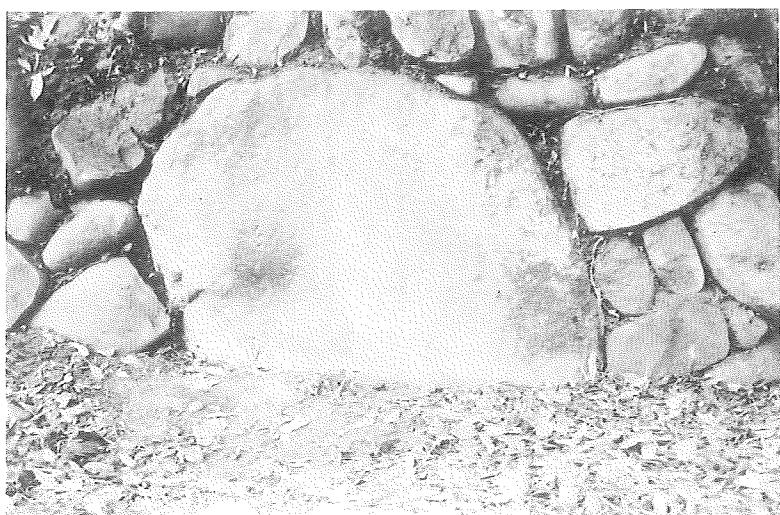
1. 賀川光夫(1955)「豊前中津市相原廃寺調査報告」 中津市教育委員会
2. " (1965)「古代史一初期仏教文化」(中津市史) 中津市
3. 小田富士雄(1977)「百濟系単弁古瓦考・その一、その二」九州考古学研究(歴史時代篇)
4. 九州歴史資料館編(1981)「九州古瓦図録」
5. 大分県教育委員会(1982~87)「一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報」



A地区近景（貴舟神社）



礎石転用状況(1)



礎石転用状況(2)

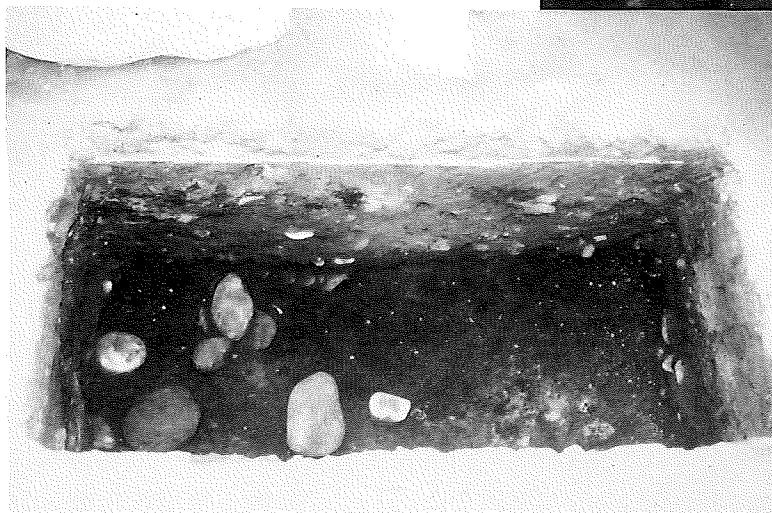
図版1 A地区の調査(1)



貴舟社境内礎石転用状況

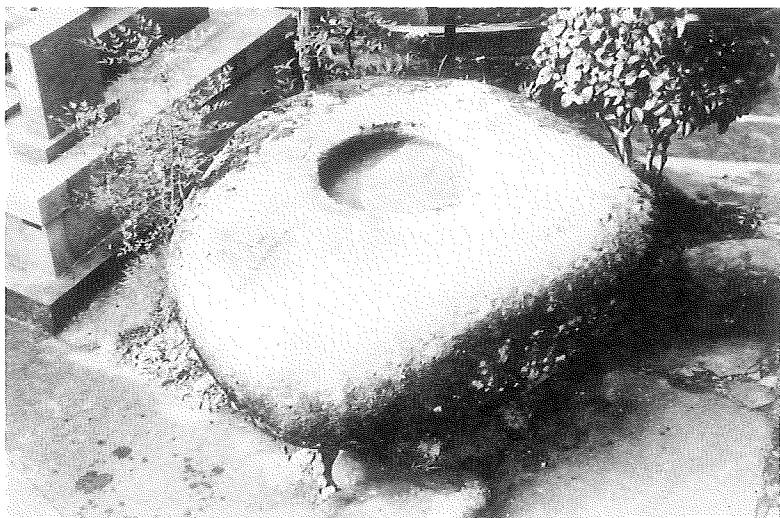


第1トレンチ土層断面

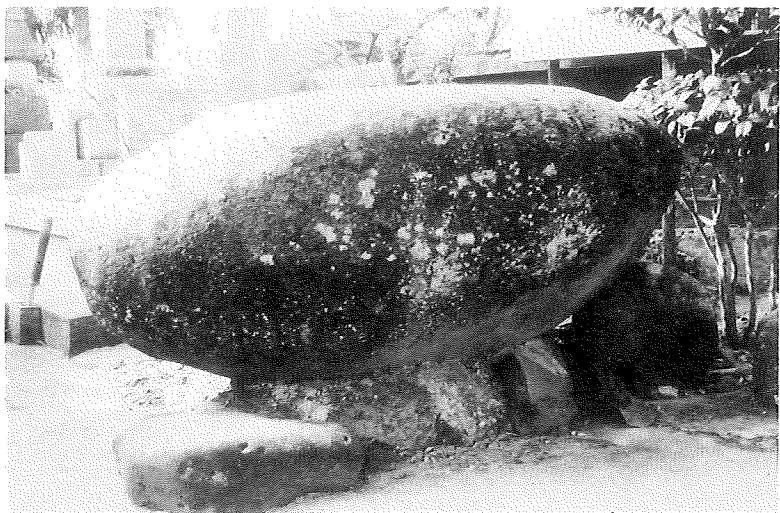


第2トレンチ土層断面

図版2 A地区の調査(2)



瑞福寺移転塔心礎(1)



瑞福寺移転塔心礎(2)



B地区遠景（北西より）

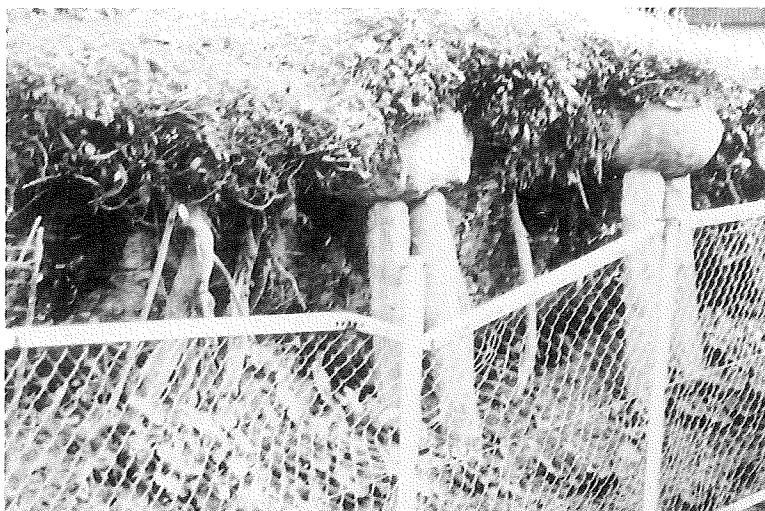
図版3 瑞福寺移転塔心礎・B地区の調査(1)



B地区近景（調査前）

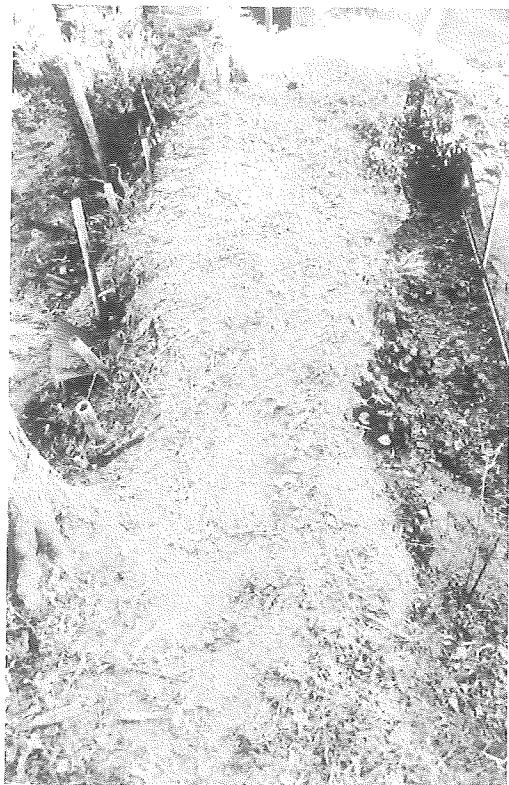


B地区近景（伐採後）



礎石遺存状況

図版 4 B 地区の調査(2)



基壇遺存状況（北より）



第1トレンチ全景（南より）



第1トレンチ南拡張区
完掘状況（北より）

図版5 B地区の調査(3)



第1トレンチ南拡張区土層断面
(中央部東面)

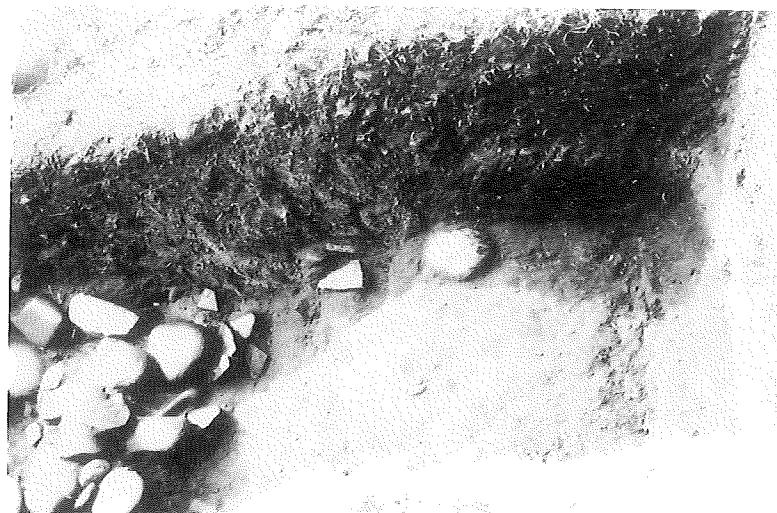


第2トレンチ
基壇端完掘状況



第2トレンチ土層断面
(北側版築状況)

第2トレンチ土層断面
(西側版築状況)



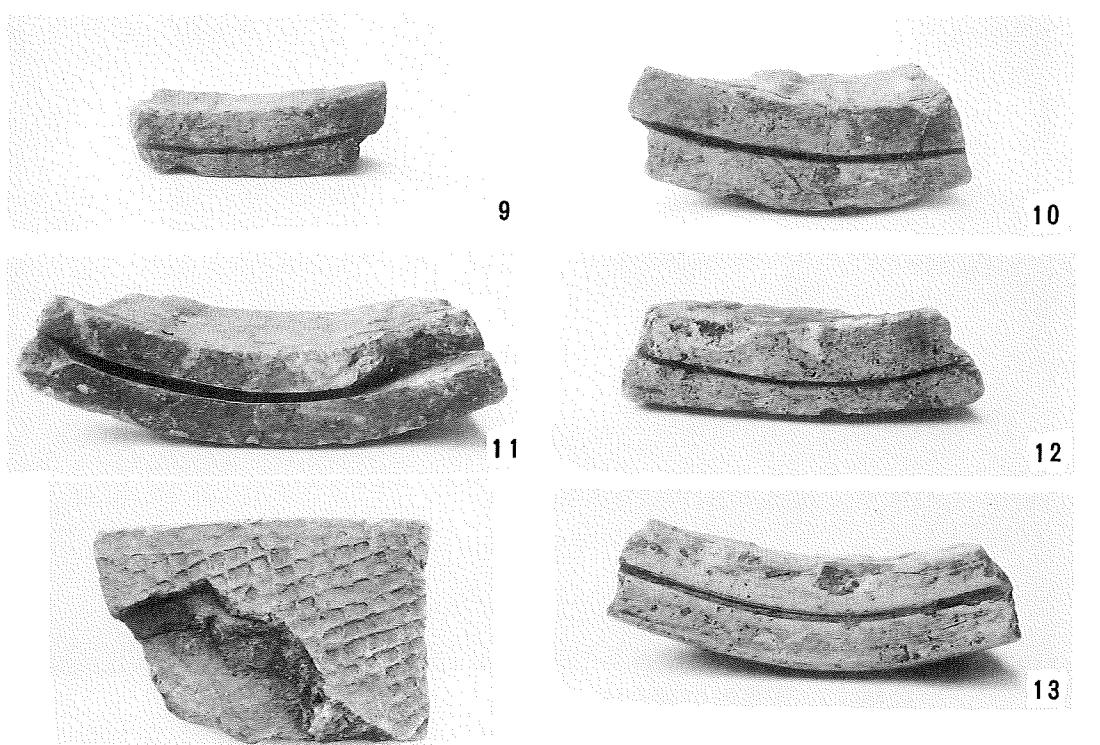
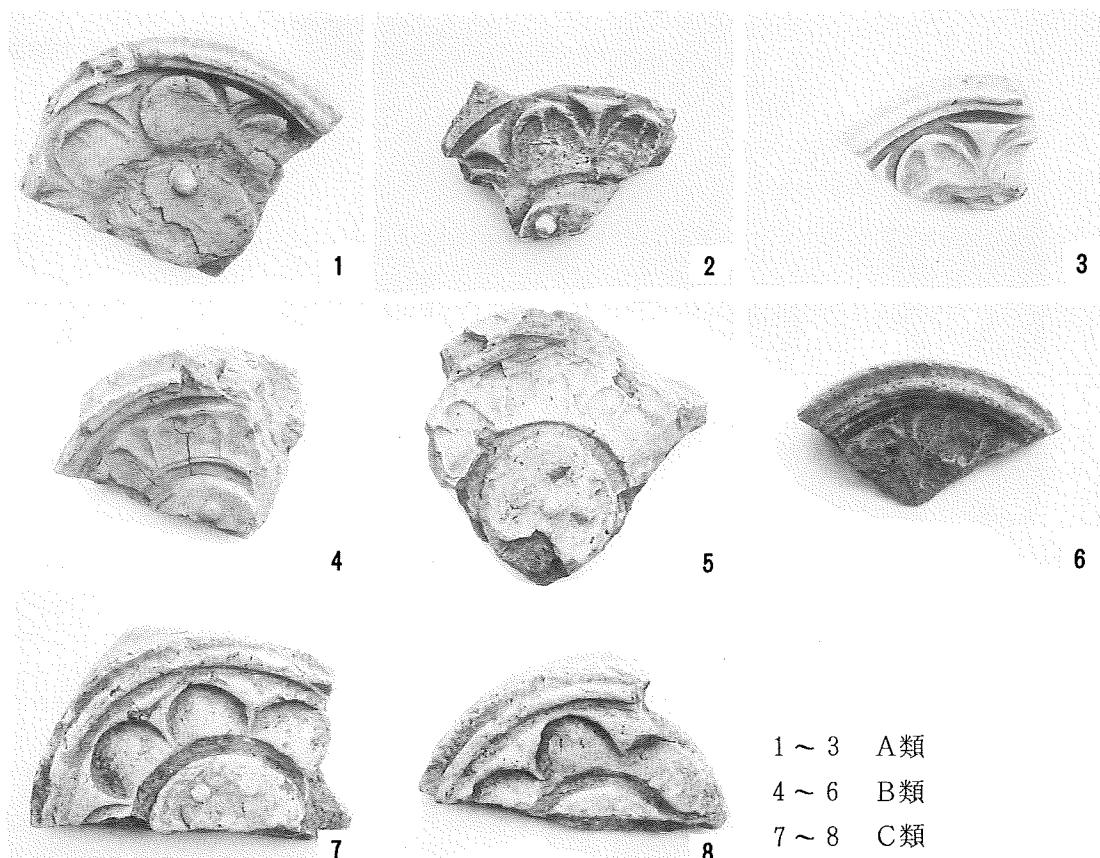
第3.4トレンチ完掘状況（西より）



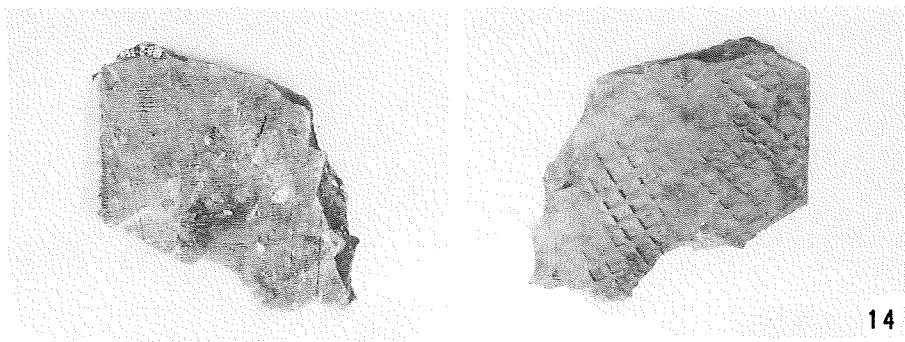
第3トレンチ完掘状況（南より）



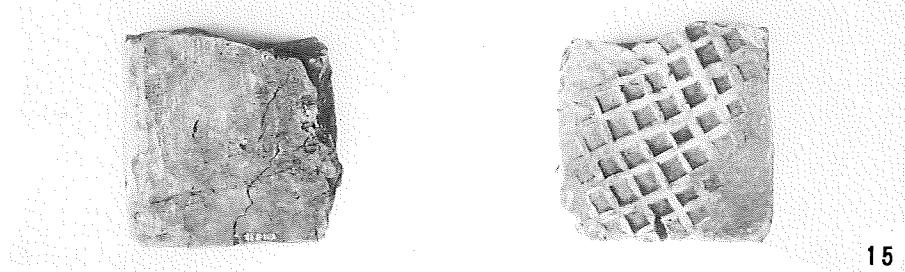
図版7 B地区の調査(5)



図版 8 相原廃寺出土軒丸瓦・軒平瓦



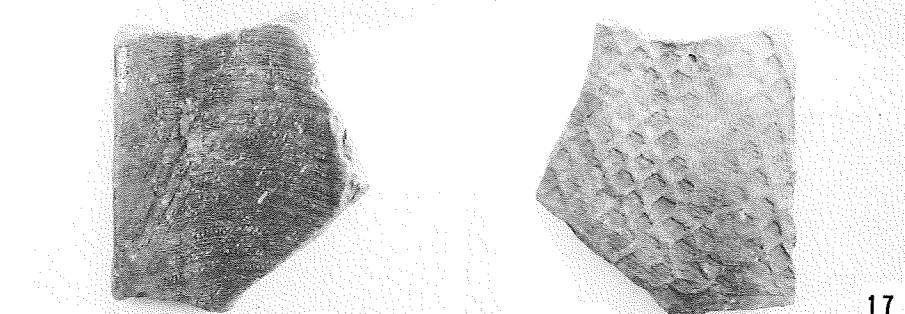
14 A-1類



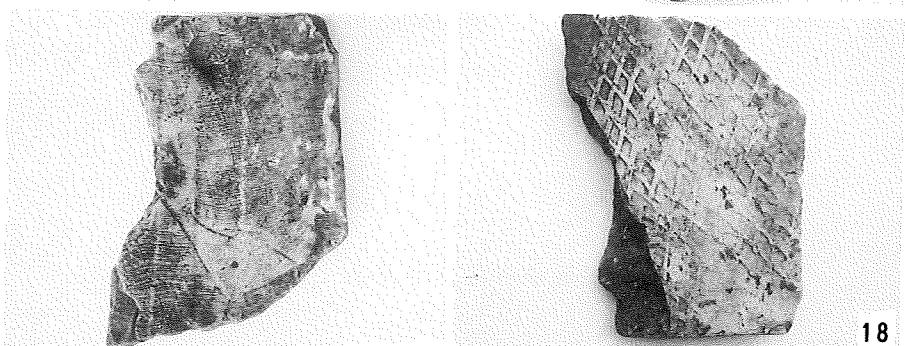
15 A-1類



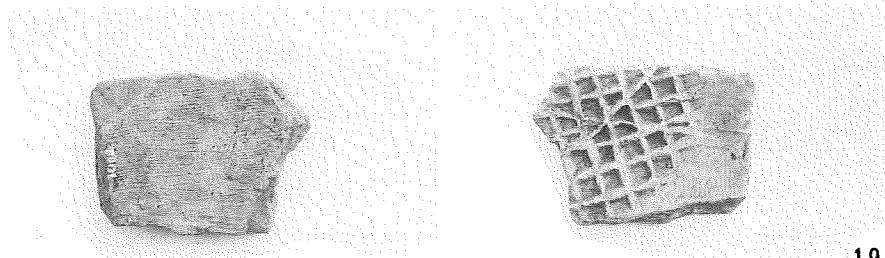
16 A-2類



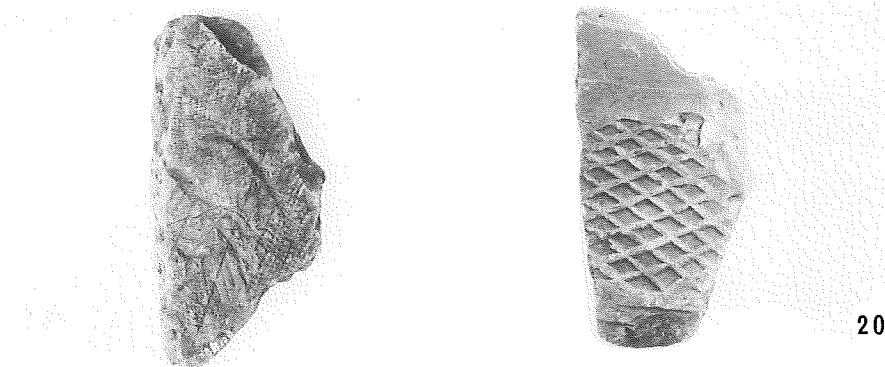
17 A-3類



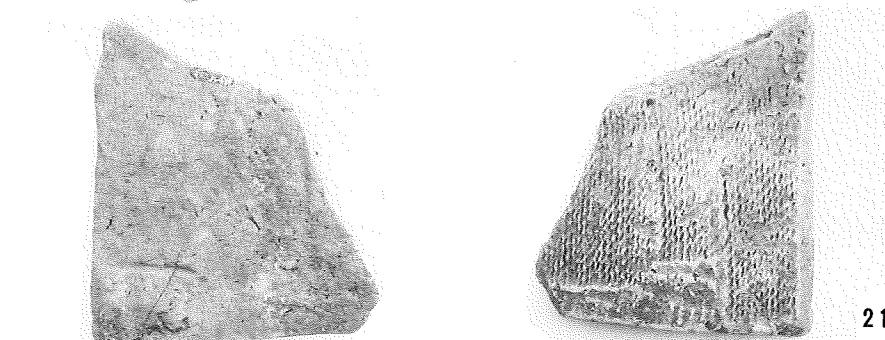
18 A-4類



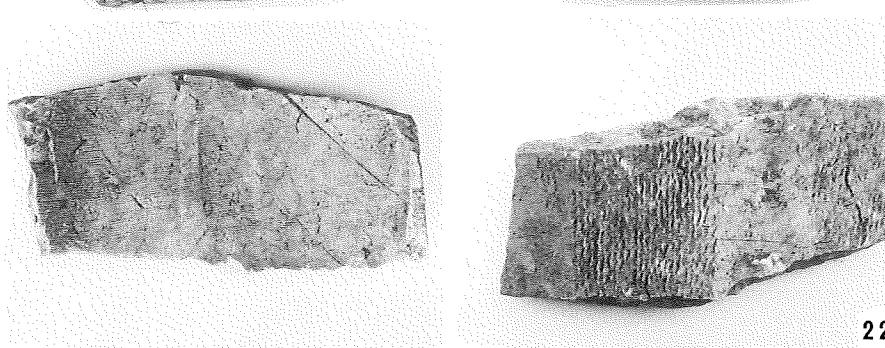
19 A-2類



20 A-4類



21 B-1類



22 B-2類

図版 10 相原廃寺出土平瓦(2)

相 原 廃 寺

中津市文化財調査報告 第7集

平成元年 3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 川原田印刷社